

既 遂

米沢 朝子

燃料の尽きた四駆を藪の傾斜の中に置き去りにした。誰のとも知れぬその車が、背後でゆるゆると樹木の間を滑り落ちていくのが分かった。少しずつ、確実に、それは前進している。タイヤと落ち葉がみしみしと擦れ合う音。小石を跳ねる音。あえてサイドブレーキは引かずに降りた。タイヤの回転が徐々に速まってゆくの分かる。私はジャケットの襟を掻き合わせながらゆっくりと振り返り、それを見届けた。助手席には路傍一夜の契りを交わしただけの、これといって特徴のない容貌の女が、こんなことは想定していなかった、とでも言うような、中途半端な顔で眠っているのがちらと見えた。舵を取る者のいなくなつたその車は、自然の形状に翻弄されながら横転を繰り返し、途中から一気に谷底へと落ちていった。腹に応えるような、骨に染み入るような衝撃音。森閑とした山に響いたその音の、思いもよらぬ重さに私は戦き、その時麓へどんな風にして下つていったのかは憶えていない。

長い年月が経った。しばらくの間妙な夢にうなされたり、他人の視線を異常に気にするばかりの臆病な日々を送っていたが、実家の家業を引き継ぐため田舎に帰つた私は、それをきっかけに再生を図つた。その後妻を娶り、一男一女の父親にもなつていった。安定した生活の中に浸るうち、かつての鬱的思考も、己の悪行を事あることに思い出し慟哭する、といった病的な精神も影を潜めていた。あの脳天を突き破る、それでいて磐石の重さで楔を打つかのよな音に、はっ、と目が覚めることもなくなつていった。

あれは現実のことではなかったのではないかな。

私にあんな恐ろしいことができた筈がない。あの女も、もしや幻だったのかもしれない、などと思ひ込もうとしていた。大きな記事にもならなかつたその事故は、私の願ひ通り世間の喧騒の中に霧散したに違ひなかつた。だが嫌なことに、女の容貌はすでに忘れてしまったのに、掌の内にある女の首筋の感触と、そこにあつた黒いはずりとした黒子、車の中にも充滿していた、噎せ返るような独特の匂いは、いつまでもこの躰に付着しているように、それは女の執念のような気もして胸苦しくもあつた。明け方近く、何やら重苦しい空気が立置けている気がして目が覚めた。夕べから降り続けている豪雨のせいかと思う。私は家のすぐ近くを流れる川の水位が気になり、雨具を着け外に出た。あのまま蒲団の中にも眠れなかつた

だろうし、何よりすぐに氾濫してしまう川のことが気になつて仕方なかつたのだつた。

雨具を叩く横殴りの雨に吹き降られながら沈下橋の上に乗ってみると、川の水流は橋桁のすぐそこにまで近付いていた。いつもは膝の辺りまであるかなしかの水位で流れる静かな川だが、遠近を堰堤で固めてしまつたせいからすぐにこのようなことになる。濁流は川端を削り取りながら益々勢を増していくようだつた。欄干のない橋の上に立つてそれを凝視していると、ついふらふらとそこに引き込まれそうになる。だが私は飽くことなくその流れに見入つた。不安の一方で、流水や泥を一気に押し流してゆく水の勢いに、どこか胸の空く思いもしていったのだつた。その時、灰汁色をした流れの水面を、川下から上流へとすると泳いでゆく白蛇がいた。白蛇は確か幸運を招くというのではなかつたか。しかもあの蛇は尋常でない大きさ。私は急いで蛇の後を追つた。

蛇は濁流に飲まれたかと思うと、次にはその白い鎌首をもたげ息を継ぐ。そして器用にどこかの奥を目指し、蜿蜒とした川辺に沿つて泳いでゆくのだつた。その息継ぎの度に何やら声のようなものを聴いた気がしたが、気のせいだろう。そしてついにそれは川岸に這い上がり、その全身を露にした。まだ夜は明けきらず、雨は延々と吹き降る。その水墨画のような景色の中で、ほんのりと桃色を帯びたそ

の白さは私の心を捉えた。蛇はざわざわと音を立てながら藪の中へと入つてゆく。そして今度ははっきりとその声を聴いた。

「忘れまじ」

私にはそう聴こえた。私は悪かれたように、その後も目を離さず藪の中のそれを追ひ続けた。蛇の方もいつからか私が後を追っていることを承知しているような動きで、ざわざわと拗りながら勢いよく進んだかと思うと動きを止め、鎌首をもたげ、後ろを振り向くような素振りを見せる。蛇の腹と土塊とが擦れ合うその音の底に、忘れまじ、忘れまじ、という声が連なる。道なき道を追う私。躰は蛇のように冷たくなつていった。蛇は私を挑発するかのようになり、下り坂の藪へと降りてゆく。私は思い切つて這うような体勢になり、その白い鎌首を、素手で掴んだ。

と、その刹那、私の躰は得体の知れない気配に引かれ、ずるずると崖を滑り落ち始めた。私の掌は、蛇にとどめを刺す勢いで全身の力を集積する。白い躰が私の腕に巻きつき最後の抵抗を見せた。私は木々の間をそれと共に転がり落ちながら、掌の内の感触と、そこに黒い印があるのを認めていた。

様々な事柄が一気に押し寄せる。舌の根で何かを念じた。時間があの場所へと、激しく遡つていった。